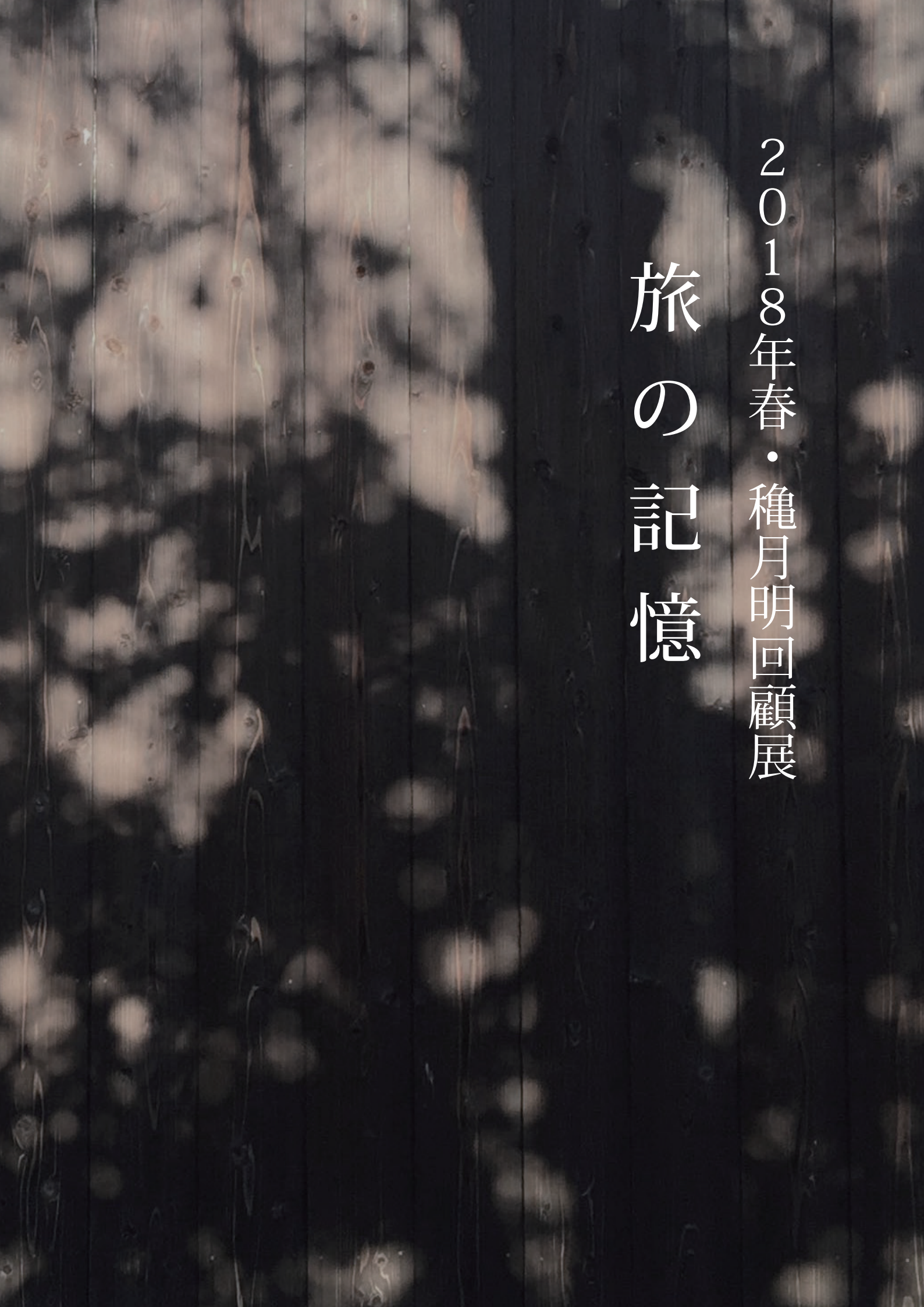


2018年春・穐月明回顧展

旅の記憶

ご挨拶

水墨画家 穐月明は昨年4月に 87歳の生涯を閉じました。画家を目指してより画業のみに専心し、その粮とするため膨大な書籍、古美術を集め、日本各地を旅しました。その生き方はかつての文人の生き方を彷彿とさせます。今回の企画展は残されたスケッチ、写真、記録や証言等から可能な限り画業の一覧を試みました。

「野の佛」で人気を博し各地の画廊やデパートで個展を開き多くの方々にその作品が愛されましたが、今回残された作品や記録を整理してみると実は様々な試みを行い、色々な所で仕事をしていたことが分かります。

まだ十分な研究は出来てはいませんが穐月明が生涯を掛けて目指した美と大切にした文化をご理解いただく一助になればと思います。

平成三十年二月吉日

一般財団法人 東洋文化資料館 青山讃頌舎

理事長　穐月大介

雪の寺（松尾寺）
元々55歳の時の作品ですが晩年青色を加筆しています。雪は「抜き」で描かれモチーフは輪郭をほとんど用いず墨の濃淡で表されています。墨の「ぼかし」や「かすれ」で木も雪の質感も寒い朝の空気感まで表現しています。僧侶たちの足の冷たさまで感じさせる作品です。

穐月明

穐月明は絵を描くことだけで成功を収めた希有な水墨画家です。京都市立美術大学（現京都市立芸術大学）を卒業後、師に付かず、弟子を取らず、派閥に属さず、ほとんど個展だけで作品を発表し続け、独自の画風は多くの支持者を獲得しました。しかし大きな賞や役職には無縁でマスコミに採り上げられることもほとんど有りませんでしたので知る人ぞ知る画家でした。一般に知られているエピソードは長者番付の上位に何年も名を連ねていたことかもしれません。それはそれだけ売れたと言うことです。

明は高野山大学の教授であった穐月聖憲の末子として高野山で生まれ、4歳の時に郷里の寺 愛媛県西条市の実報寺に帰り少年時代を過ごしました。大学では油絵と日本画を習得しますが卒業間際、中国清朝の画家金冬心の画集に出会い独習で水墨画に転向します。

下宿は京都の醍醐寺光台院でしたが、その時、居候先の僧侶の娘天野由紀子と結婚しました。始めは京都女子高校の講師もしていましたが、やがて美好堂画廊の専属画家として定収を得ます。それ以来画業一本で作品を発表し続け人気を得て行きます。

37歳の時、居候先の義父が亡くなり山科に引っ越しますが、環境が悪く、絵も売れるようになった52歳の時、伊賀に居を構えました。

85歳の時、美術館「日月舎」を建て公開しますが平成29年4月15日87歳で生涯を閉じました。

想い出 喧嘩両成敗

現在の実報寺の桜

当時の実報寺本堂

故郷東予の景色

明の家族写真

想い出 喧嘩両成敗

明の子供の頃の想い出を描いた作品です。製作年代は不明ですが60代でしょうか、線描で軽妙に描く素描の手法が用いられています。

明の父聖憲は高野山大学教授から郷里実報寺に帰り住職をしながら女学校の校長に就任しました。聖憲は愛媛の女子教育と社会教育に尽力した先駆者で、戦時中に二百回以上の講演を頼まれ無理をした末亡くなります。明が十歳の時でした。

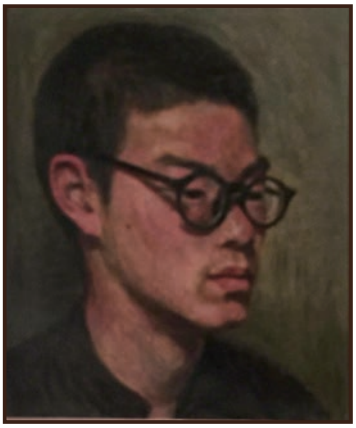
立たされているのは本人と姉。障子には母と祖母、兄2人の影が映っています。父親の影が無いのは亡くなっていたからで、普通の民家なのは住職を失った家族は寺に居られなかったからです。母親は子供たちを厳しく育てたようですが、明は母を慕っていたと言います。その後明の兄が住職となり家族は実報寺に戻りました。

本尊丈六地蔵菩薩

父 聖憲上人像

聖帝山 実報寺

欽明天皇勅願と伝わる古刹で本尊地蔵菩薩は座高3mもある鎌倉仏です。実報寺という地名にもなっている大きなお寺です。境内の一樹桜は有名で、俳人小林一茶は「遠山と見しは是也花一木」と詠んでいます。



後藤氏の肖像（油彩、個人蔵）
美大生だった頃の油彩作品。モデルは同じ下宿人の後藤氏

母の像（29歳）
卒業間もない頃だろう、日本画的手法が色濃い作品。賛は母親が書いている

明と由紀子
結婚間もない頃だろう

醍醐寺光台院門前
当時の門前、自転車に乗っているのは長男の大介

画室の明
明は居候先の光台院で本堂を借り画室にしていた

光台院門前の桜並木
光台院は醍醐寺内の塔頭で僧の寄宿舎に使われていた。門前の桜並木は当時のまま

現在の光台院門前
門はそのままだが中の建物は建て替えられている

現在の本堂
移築されているが当時に近い建物

醍醐時代

始め京大の哲学科を目指していたようですが失敗し京都市立美術専門学校（現京都市立芸術大学）の油彩科に入学し京都醍醐寺内の光台院に下宿します。当時光台院には天野穠文僧正が家族で住んでおり、そこで娘の由紀子と出会い結婚します。学生結婚でした。

共働きで明は京都女子高校の講師もしていましたが貧乏で卒業後も光台院に家族で間借りしていました。本堂も画室に借りていましたが、犬、兎、猪、アヒル、雉、金鶏など様々な動物まで飼い、動物園のようでした。天野家は余程理解があった様です。

37歳の時居候先の義父が亡くなり醍醐寺にはいられなくなり山科に移りました。

荘子貼雑屏風（37歳）
貼られているのは荘子の抜粋とその場面

李朝漁船文壺図（38歳）
高麗美術館所蔵の名品「鉄砂帆船魚文壺」を写生させて貰ったのだろう。あちこちで本物を見せてもらい勉強していた

鉄砂帆船魚文壺 李氏朝鮮時代
京都高麗美術館所蔵

おちばひろい（27歳）
光台院門前

もぐらの死（37歳）

明の詩（37歳）

高山寺小川老師像（34歳）

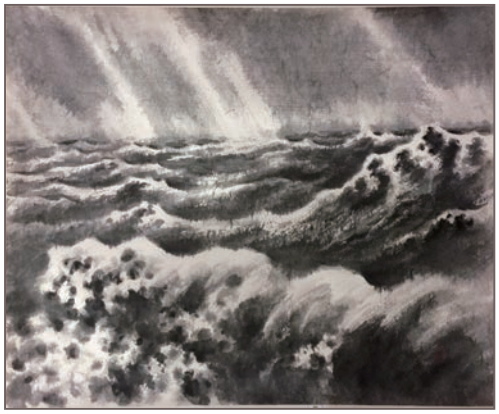
20～30代の作品

学部修了後は日本画専修科に進みます。しかし卒業間近中国清朝の文人画家金冬心の画集に感銘を受け墨絵に転向しますが、与謝蕪村、池大雅、富岡鉄斎など多くの文人画家も研究していたようです。しかし画風は真似ようとはせず独習で墨絵を始めます。また煩わしい人間関係は嫌いで、始め京都画壇に入っていたようですが其れも止めてしまいました。

此所に採り上げたのは30歳前後の作品や習作で、青年らしい悩みや後の作品にも受け継がれるユーモラスな所、当時から漢籍に親しんでいた様子もうかがえます。

明は画家になると決めて以来ほとんど郷里には帰りませんでした。相当な覚悟があったようで絵に対する姿勢も大変厳しいものでした。

40代



波濤・佐渡冬図（46歳）

風雀図（42歳）

日輪・橋（49歳）

鉢中の天（40代）

山科の借家

鉢中の天（４２歳）資料
山種美術館賞受賞作品写真

山科時代

山科の家は二軒長屋の借家で国道一号線と新幹線がすぐ横を走る騒々しいところでした。神経質な明には辛い環境だったようです。生活はまだ共働きでしたが美好堂画廊と専属契約を結び定収を得て画業に専念できるようになります。絵も次第に売れ始め、第一回山種美術館賞に入選（42歳）します。40代で技法は完成していき人気も出てきます。そして52歳の時、伊賀の大村神社の裏に自宅を構えました。

鉢中の天

この「鉢中の天」は山種美術館の受賞作品とほぼ同時期の作品のようです。鉢と水の表現はつたなく見えますが、蟹は生き生きしています。

壺の椿（42歳）

石仏・勢至菩薩（42歳）

紙風船（47歳）

石仏・如意輪観音（47歳）

写生に使った雑器・竹籠、志野鉢、団子鉢、紙風船

40代初期の作品

この時代はまだ画風が確立せず拙さが残りますが、軽妙でかわいらしい素描、輪郭を使わず墨の「ぼかし」と「かすれ」で立体的に表現された椿や石仏など後の穐月明作品に共通する作風が現れています。絵に賛（言葉や詩）を入れるなど文人に憧れていたことが伺えますが、作風は文人画の技法をまねようとはしなかったようです。

絵のモチーフ

名高い骨董を写生したりもしていましたが、むしろ雑器や民芸をよくモチーフにしました。「鉢中の天」の鉢は昔は何処にでも有った団子鉢です。花は豪華な園芸種は描かず野の草花を好みました。よく写生にも行き各地の野山や海、村を描いていますが、日常の風景に着目しています。「野の仏」のシリーズもその一つでしょう。

阿弥陀如来（49歳）

籠の椿（49歳）

茄子と葡萄（47歳）

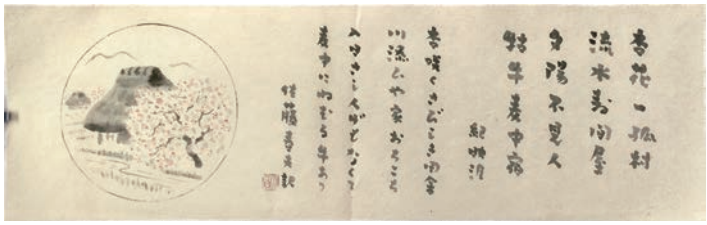
鹿・御堂（48歳）

十牛図・牧牛（48歳）

地蔵と紙風船（48歳）

明墨・百爵図（伊賀市蔵）

端渓硯（伊賀市蔵）



杏の藁屋根（48歳）
唐紙、青墨、色墨

文房四宝

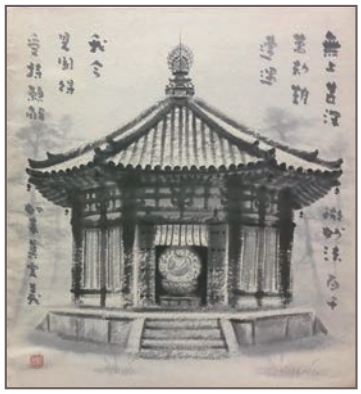
稚月明の技法は「ぼかし」と「かすれ」に有ると言えるでしょう。求める効果を出すため様々な墨と紙と筆を試していたようです。此所に上げた筆、墨、硯、紙は中国の物です。

40代晩年の作品

風景、仏画、椿、石仏、素描どれも稚月明らしさが出ています。40代で作風は一旦確立されるようです。

鉢中の天（51歳）

不動明王（53歳）



御堂（54歳）
賛は真言宗仏前灌頂次第・懺悔

自宅の明（54歳）
写真家池田弘氏撮影

佐久間良子と明（56歳）
雑誌の取材で対談

明と由紀子（54歳）
写真家池田弘氏撮影

50代の作品

画風はさらに洗練され世間から高い評価も受けるようになります。其れにともない色々な注文も来るようになります。女優佐久間良子さんとの対談や現西宮市大谷記念美術館などにも買い上げられます。西国三十三ヶ所（大谷教育文化振興財団蔵）四国八十八ヶ所（土佐塾学園蔵）の寺と本尊を描く仕事を引き受け四国、西国の全ての寺を写生して回り始めるのもこの頃からです。

一方御伽草子など新しい表現への試みも続けていました。

雪の山門・石山寺（50歳）

星夜渡橋（52歳）

御伽草子・一寸法師 (57 歳)

御伽草子・瘤取り爺さん (57 歳)

御伽草子・竹取物語 (57 歳)

御伽草子・桃太郎 (57 歳)

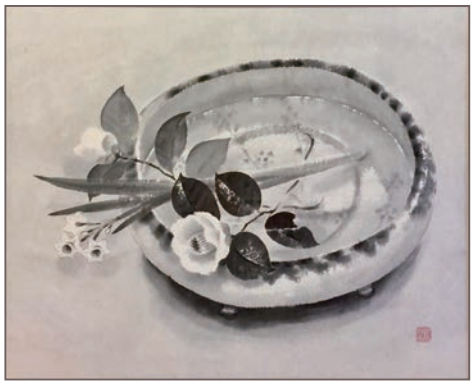
御伽草子・ぶんぶく茶釜 (57 歳)

御伽草子の個展 (57 歳)

御伽草子

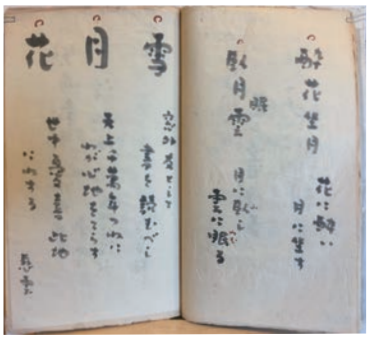
漢籍、仏教などに造詣の深かった明ですが、小さな時から可愛い物も好きだったようです。今までの画風を離れ、誰でも知っている御伽草子を自由でユーモラスに描く試みをしています。

大籠の秋草菟（58歳）



水仙・椿花（50歳）

野の仏（58歳）



月光詩歌集（賛のメモ）

別尊雑記

虚堂録

白描・如意輪観音

八十八ヶ所スケッチ土佐四万十

資料とスケッチ

明は一万四千点以上の書籍を集め資料にしていました。それらの資料から賛（絵に添えられる詩や言葉）になる言葉を抜き出し書きためたり、資料から白描を描き仏画の下書きにしていたようです。また、初めは写生に出ては現地で絵を描いていたようですが、さすがに五十代になると、現地で簡単なスケッチと写真を撮って描いていたようです。

山岳如意輪観音（63歳）

富士山・波（60歳）

椿・蘭（63歳）

野の仏（60歳）
NHK版リソグラフの原画

稲月明水墨画集「旅の途中」
京都書院より出版、60歳までの作品を集めた画集

稲月明四国八十八ヶ所と西国三十三ヶ所の展覧会

60代の作品

作風は輪郭線もこだわりなく使う軽妙なものになっていきます。バブル景気も有って人気も益々高まります。NHKからリソグラフが何種類も発売されたり、画集「旅の途中」も出版されます。しかし62歳の時、癌を患い胃の全てと肝臓、腎臓、膵臓の一部を切除する大手術を行いますが一命を取り留めます。その後再発は免れ四国八十八ヶ所の完成、増上寺格天井画作成（五九歳）など尚旺盛な制作を続けます。

孤月鐘声（60代）

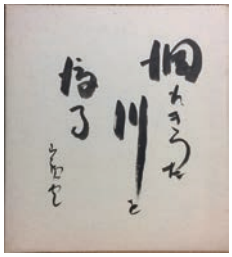
跳躍虎（60代）

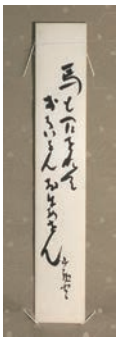
伝南蛮縄簾水差し
（伊賀市蔵）

伝李朝白磁壺
（伊賀市蔵）

日本・伝鎌倉時代懸仏
（伊賀市蔵）

パキスタン・菩薩半跏思惟像
ガンダーラ　3～4世紀
頭にはターバン冠飾を付け、左手に蓮華を持つ姿は、ガンダーラにおいては観音菩薩を表したものと考えられている。半跏思惟菩薩の原形の姿ということができる





種田山頭火・色紙と短冊
（伊賀市蔵）

中国・伝唐咸享様式如来座像
（伊賀市蔵）

古美術のコレクション

明は若い頃から骨董を集めていましたが、この頃になると欲しい古美術を手に入れられるだけ裕福になります。しかし生活は質素なままでした。

収入の大半は古美術と書籍に費やしたと言って良いでしょう。

コレクションにはガンダーラ仏（史上最初の仏像）のように大半を京都の龍谷ミュージアムに寄贈した物もあります。

残された古美術の大半はこの度伊賀市に寄贈致しました。仏教美術を中心に様々なジャンルの物が含まれます。

70代

阿弥陀如来（70代）

御堂讃（70代）

藤花野の仏（70代）

牡丹仔猫（70代）

十二支色紙（70代）

丙戌歳幸せを感謝
（77歳）
欲念に限りのあらじ今日ひと日、幸いなりしを感謝して生く。モデルは妻由紀子

70代の作品

絵の注文は次第に減って行きますが、自由な時間も増え「流水讃歌」のシリーズなど描きたかったものに挑戦出来るようになります。一方体力は60代の手術の影響も有り次第に衰えていったようで嘗ての鋭い筆致では描けなくなって行きます。

この頃引き受けた仕事に幼稚園の園歌に絵を付けて収めるという仕事が有り大量の絵本も購入しています。その為か絵の雰囲気は鋭さがなくなり少し絵本ぽい温かいものになって行くようです。風景も幽玄な自然より伊賀近郊の自然と人の営みを多く描き残しています。

鉢中の月（70代）

春秋池景・双幅（70代）

里山の流れ（70代）
近郊の里の風景

遊戯地蔵（73歳）
園歌にも描いていた子守地蔵

福徳弁才天（70代）

はたた神（70代）
38歳の時から毎年伏見稲荷の燈籠用に絵を奉納していた。人気の絵は配布用の布巾にされた。

園歌の下書き (84 歳まで)
園歌の仕事が最後となった

流水頌歌（ながれのうた） 穐月明展 (79 歳)
穐月明として最後の新作
発表となった個展

明の写経した般若心経写経

晩年

80歳くらいからアルツハイマー性認知症を発症し心身ともに新しく絵が描けなくなり、以前の作品に加筆や着色を始めます。それでも園歌の仕事は続けていたのですが、84歳の時それも断念します。その後は般若心経を写経していました。

85歳の時最後の力を振り絞るように美術館「日月舎」を自宅のとなりに建設、翌年には展覧会を開き自らも挨拶に顔を見せていました。

平成29年2月25日「春の企画展」開催中に脳出血で倒れ同年4月15日に永眠します。その日、見残しの桜が春の嵐で美術館に吹き込んできました。

絵が描けなくなった明は朝から酒を飲むようになりますが、今までになく穏やかに見えました。ようやく一休みできたのかもしれません。

平成30年春期企画展
穐月明回顧展「旅の記憶」

発行日　平成30年3月3日
編集発行　（一財）東洋文化資料館 青山讃頌舎
〒五一八―〇二二　三重県 伊賀市別府七一八―五
印　刷　上野印刷（株）

(一財)東洋文化資料館

あおやまうたのいえ
青山讃頌舎

〒518-0221 伊賀市別府718番地5
ＨＰ：http://aoyamautanoie.net/